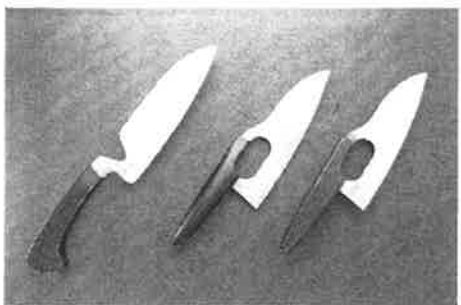


## オープン カレッジ

自助具の研究に取り組んだきっかけは、2008年にNPO法人ドリーム(脳卒中後遺障害片麻痺者の支援団体)と、愛知県立芸術大学の中島聡教授が、中心になって行われた「自助具制作ワークショップ」への活動参加であった。愛知県下でデザインと福祉を学ぶ、大学6校の学生が参加した。障害者スタッフが事前に準備した「日常生活の不便点リスト」を基に、自助具を提案、試作制作、意見交換や改良を行った。

## 伝統産業の新ビジネスモデル



滝本成人・作品

は09年に終了したが、引き続き活動を続けたい学生も現れたため、その後は、卒業研究のテーマとして、継続的に活動を続けていく。

これまでに、片手で牛乳パック開封、片手で容器開封、片手でシフトキー、片手でカメラ、片手でマニキ

ユアや片手でコンタクトレンズなどの自助具の制作と提案を行ってきた。

# 自助具で 社会貢献



名古屋大学  
工学部教授  
生活科学科  
滝本成人

た、男女平等企画推進センターの会議室で発表会を行った。このワークショップ

成人

滝本

また、研究発表の場は、自助具フォーラム、国際福祉健康産業展ウエルフェアや障害者ワークフェアにも拡大した。

次に、一般市民への情報発信を考え、15年に愛知県日進市の提案型大学連携協働事業として、「自助具の紹介と体験会」を、日進市中央福祉センターで実施し

た。

研究のための研究で終わらず、実用化することが長年の悲願であった。そのような機会が巡って来たのが、14年に福井県の伝統産業で、タケフナイフビレッジ(福井県越前市)からの依頼であった。「ふくいの逸品創造ファンド事業助成金」に、産学連携で応募する運びとなり、幸いにも満額採択された(写真の左から片手用・座位姿勢用右と左)。

生産は中量生産の位置付けで、ブレード(刃)はワイヤーカッター切断とし、グリップはシリコン型の注型成形で生産を行った。全このプロセスにおいて、製品評価とデザインの改良を同時進行させた。

自助具の考案で、常に目指しているのが「デザイン性」である。病院やリハビリセンターで使用している道具を、そのまま家庭内に持ち込むには違和感がある。日常生活に溶け込んだ自助具として、高いデザイン性が必要であると常々考えている。

また、今回の障害者包丁は、700年の歴史を持つ、打刃物の伝統産業との連携で事業を行った。自助具の生産はどうしても、大量生産には不向きな領域である。少量生産を必要とする「自助具制作」と、少量生産を得意とする「伝統産業」を、結びつけることにより、新しいビジネスモデルを構築している。

たきもと・なりひと 工業デザイン。名古屋工業大学大学院博士後期課程社会学専攻修了。博士(工学)。